

## 頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム 2012 年度派遣報告書

派遣期間 2012 年 4 月 1 日～10 月 25 日、2012 年 10 月 29 日～2013 年 2 月 15 日

派遣先：ベラウ国立博物館（パラオ共和国）、ハワイ大学マノア校（アメリカ）

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

東南アジア地域専攻 総合地域論講座

紺屋あかり

### 1. 研究テーマ

報告者は、ミクロネシア地域パラオ共和国における口承伝承を対象として、チャントをめぐる実践と歌詞継承形態の分析を中心に、現代パラオ社会における社会・政治的空間と詠唱文化との相互関係について検証をおこなってきた。平成 24 年度派遣の目的は、これまでの検証を深化させるため、(1)伝統的知識をめぐる認知体系の検証、(2)贈与システムの構造分析、(3)ミクロネシアの歴史解釈の再検討の 3 点を中心課題とした。

### 2. 派遣の内容

[ミクロネシア・パラオ共和国派遣：2012 年 4 月 1 日～11 月 30 日]

現地調査中はベラウ国立博物館に調査員として身を置き、コロール州を拠点としつつ、バベルダオブ島、コロール島、ペリリュウ島、アンガウル島におけるフィールド調査を実施した。以上の研究課題(1)(2)を中心に、カヤンゲル島を除いたパラオ全土において聞き取り調査、参与観察、資料収集、チャント歌詞収集を行い、口承伝承の記録（テキスト化、パラオ語校閲、英語訳）作業も平行して行った。

[アメリカ・ハワイ大学マノア校：2012 年 11 月 30 日～2013 年 2 月 15 日]

ここでは、以上の研究課題(3)を中心に、太平洋研究関連資料・文献収集を実施した。史学科セミナー「ミクロネシア歴史学」への参加と発表を毎週継続して行い、ミクロネシア研究に携わる大学院生らと意見交換を行った。さらに東西研究センターや太平洋研究センターの主催するセミナーへの参加を通して、ミクロネシアや他のオセアニア地域研究者らだけでなく、アジア研究、アメリカンスタディーズなどを専攻する生徒らとの交流の機会も得た。文献収集はハミルトン図書館と東西センター図書館を拠点として行った。また、ハワイに在住するパラオ人数名へのインタビューも実施する機会を得た。



写真1：ガラルド州の伝統的儀礼会場



写真2：オギワル州に伝わる伝説をもとにしたモニュメント

### 3. 派遣中に印象に残った経験

パラオ派遣中に所属させていただいた博物館は、他分野研究者にとっても研究拠点となることが多く、普段日本では会う機会の少ない、国内外のパラオ、オセアニア研究者らとの交流機会を得た。そうした意見交換を通して様々な知見を得たことは大変貴重な経験であった。また、2012年末のアメリカ総選挙と同日パラオでも大統領選が行われたが、その際選挙をめぐる国内の動向を近くで観察できたことも重要な視座となった。また、パラオ派遣中には水野一晴先生に現地でご指導いただいた。この場をお借りして深く御礼申し上げたい。

ハワイ派遣中には、パラオチャント研究の先駆者である **Barbra B. Smith** 名誉教授（ハワイ大学、民族音楽学）にお会いする機会を得て、1950年代におけるチャント実践の状況などをめぐりさまざまな質問をぶつけることができたことが大変貴重な経験となった。生活面では、ハワイ大学内の寮生活でははじめは慣れない共同生活に戸惑ったものの、日常生活の中で常に他分野研究者らと会話する機会を得た事で、多くの刺激を与えられたことは非常によい経験であった。また、史学科セミナーには、パラオ伝統政治を対象に研究を実施しているパラオ人学生が参加しており、互いの異なる視座の差異性について議論し合う有意義な時間を得た。研究会ではこぼれ落ちるような、しかし重要な議論ができた実感している。



写真3：ハレ・マノア（大学内の寮）から見下ろしたハワイ大学のキャンパス風景

#### 4. 目的の達成・反省点

まず、(1)パラオ民族知識認知体系については、バベルダオブ島アイメリーク州の2村落（イムール、ガラケアイ）のおよそ30世帯（アイメリーク州全70世帯うち）を対象に世帯調査を実施し、質問表に基づいてデータ収集を行った。質問表の作成は、調査協力者やインフォーマントと議論を重ねながら、生業、芸能、歴史の大きく3種類に分類した上で詳細な項目を設定した。調査過程において、秘伝の知識利用や継承形態の事例にアクセスできたことで、パラオ知識体系について以前よりも深く理解することができた。しかし、一人ひとりへの聞き取りにかなりの時間を要したため予定していたほどのデータは収集できなかった。また、アイメリーク州には現在、夫婦ともにアイメリーク州出身者ではない世帯の増加、アイメリーク出身者のグアムへの移住（およそ500名）、アイメリーク出身者の他州への移住の状況から、アイメリーク州の状況を体系的に理解するには、上記にあげたアイメリーク州以外の場所にも調査範囲を拡大する必要があることが分かった。今後の課題としたい。(2)贈与システムの構造分析については、マルキョク州で開催された第一子誕生祝いでの贈与事例と、コロール州で開催された葬送儀礼の贈与事例を中心に贈与体系を検証した。儀礼は近年拡大化傾向にあり、参加者は多いときで500名を越え贈与額も\$10,000を超える場合もある（米\$だけでなくパラオ固有通貨も交換される）。特に贈与の分配方法については、家々によって異なる慣習法を用いる上に、非常にセンシティブな問題となるため情報にアクセスすることが一部困難であった。更なる追跡調査の必要性がある。



写真4：エサル州の葬送儀礼の一場面



写真5：マルキョク州の第一子祝い儀礼での贈与金収集の一場面

また上記に設定した研究課題と平行して、パラオナラティブアートを対象に、現代視覚芸術家らがどのように口承伝承を表象するのかについて、パラオを代表する現代視覚芸術家への聞き取り調査を実施した。その結果は、パラオ口承伝承の具現化形態の変遷についてまとめた論文”*Transforming of Narrative Art in Palau*”の中で検証した。



写真6：ミラドの神話をモチーフにしたパラオ現代アート

ハワイ大学派遣時においては、おもに(3)ミクロネシアの歴史の再検討を中心とした。受け入れ教官である David Hanlon 教授（史学科）に直接ご指導いただいたのは、大変貴重な経験であった。ミクロネシアの口承伝承を「書く」というこれまで研究者らが蓄積してきた作業が、当核地域に与える影響について再考するよい機会となり、またそうした歴史解釈をめぐる議論を詳しく検討することで、世界におけるミクロネシアの位置づけについてこれまでとは違った角度から捉える視座を得た。さらに史学科セミナーを通して様々な研究立場の学生と意見交換できたことは今後の研究に活かされるだろう。一方、資料収集については、おもにハミルトン図書館5階の Pacific Collection で実施した。パラオ統治時代（特にドイツ時代、日本時代、米国

信託統治領下) の一次資料を中心に、オセアニア地域の口承伝承研究分野のレポート、博士論文をはじめ、パラオ人研究者の論文などにアクセスすることができた。

#### 5. 今後の課題と目標

平成 24 年度の派遣において収集したデータは、執筆中ないしは 2013 年に執筆する予定の投稿論文と博士論文に反映し、国内外に発表していく。今後は、本派遣で培った人脈をさらに深め、オセアニア研究拠点のあるハワイ、ニュージーランド、オーストラリアの関連大学や研究機関を中心に研究成果をアウトプットしていきたい。